

知的障害者ホームヘルプの発達支援機能に関する考察

生涯教育計画コース 丸 山 啓 史

Human Development and Home-and-guide-help for People with Intellectual Disabilities

Keishi MARUYAMA

The aim of this paper is to clarify the effect that home-and-guide-help has on the human development of people with intellectual disabilities, and the role that helpers are asked for.

This paper is based on interviews with users (or their parents), helpers, and helper centers.

First, the study demonstrates that home-and-guide-help enriches the users' pleasure. The enrichment of pleasure is more respected than the acquisition of social skills. Second, the study shows the necessity of human communication between the helper and the user. This suggests that helpers do more than compensation for disabilities.

目 次

はじめに

- 1 知的障害者ホームヘルプの理論的課題
 - A 知的障害者ホームヘルプについての諸言説
 - B 理論的課題の所在
- 2 研究方法
- 3 知的障害者ホームヘルプの目的とヘルパーの役割
 - A 生活内容の幅の拡大
 - B 利用者の楽しみの拡大
 - C 利用者理解への要求とヘルパーの役割
- 4 総括と今後の課題

はじめに

これまでの社会教育研究において、知的障害者の学習・発達をめぐることは、障害者青年学級など組織された教育・学習の取り組みが主に議論されてきた¹⁾。しかし、宮原誠一が「形成と教育」について論じたように、人間は組織された教育・学習の場においてのみ発達するのではなく、社会生活全体を通して形成されるし、発達していく²⁾。このことは知的障害者にとっても同じである。知的障害者の発達についてより深く考えるためには、生活のあり方に目を向けることが必要だといえる。

発達につながるような知的障害者の「豊かな生活」については、その生活を大きく三つの領域に区分する考

え方が定着してきている³⁾。論者によって表現は異なるものの、「居住の場での生活」「労働などの日中活動」「自主的な学習・文化活動を含む余暇生活」という三つの領域の充実が求められているのである。しかし、知的障害者の生活実態をみると、「自主的な学習・文化活動を含む余暇生活」における社会的支援は貧困であり、そのことも影響して余暇生活が生活領域として十分に確立されていないという問題がある⁴⁾。知的障害者の余暇生活支援のあり方を考えていくことが、生活の質(QOL)それ自体の充実という点とともに、知的障害者の発達という点からも課題になるといえよう。

そうした問題意識に立って、三つの生活領域の一つとして知的障害者の余暇生活をみた場合、一般的に社会福祉に区分される支援・援助が小さくない役割を果たしていること、果たし得ることが分かる。知的障害者の余暇生活支援について考えていくためには、教育に区分されるものだけでなく社会福祉的援助も視野に入れなければならない、特に発達との関係で考えるためには、社会福祉的援助がもつ発達支援機能・教育的機能の検討も必要になるのである⁵⁾。しかし、そうした検討は、教育学においても社会福祉学においても十分になされてきていない。

そこで、本稿では、現在の障害者福祉制度のもとでは余暇生活支援として最も期待できる、知的障害者ホームヘルプについてその発達支援機能に関する考察を行う。知的障害者ホームヘルプは、その名称のために自宅において介護を行うものとして受け取られやすいが、

外出時の介護を行うガイドヘルプ(移動介護)を一形態として含むものである。ガイドヘルプは、散歩や買い物付き添い、プール・映画館・遊園地などに遊びに行くときの付き添い、様々な場所への送迎など、余暇・社会参加のための活動に幅広く利用することができるものである。

知的障害者ホームヘルプは近年になってようやく整備が進み始めたものであり、ホームヘルプがそもそも何を指すのか、ヘルパーに求められる役割は何かといったことがあまり議論されていないのが現状である⁶⁾。知的障害者ホームヘルプの目的とヘルパーの役割を明らかにすることによって、知的障害者の発達にとってホームヘルプがもつ可能性、知的障害者ホームヘルプの発達支援機能を検討していくことが必要である。

以下では、先行の議論をふまえることで知的障害者ホームヘルプの目的やヘルパーの役割に関する理論的課題を整理する。そして、関係者へのインタビュー調査をもとに、それらの論点を中心に検討し、知的障害者ホームヘルプの発達支援機能を考える。

2 知的障害者ホームヘルプの理論的課題

A 知的障害者ホームヘルプについての諸言説

知的障害者ホームヘルプそのものの未整備を反映して、知的障害者ホームヘルプの実践について理論的に整理したものは見当たらない。そこで、全日本手をつなぐ育成会(知的障害児の親によって結成された組織)や全国社会福祉協議会など、知的障害者福祉・知的障害者ホームヘルプに比較的大きな影響力をもつ団体の出版物における議論を中心にみていく。そこから、知的障害者ホームヘルプの目的やヘルパーの役割に関するいくつかの代表的な見方を整理し、理論的課題の提示へとつなげたい。

まず、全日本手をつなぐ育成会から発行された『支援費ってだいじょうぶ!?』の「ホームヘルプサービス」の項をみてみたい。ここでは、ガイドヘルプを利用して生活の体験を広げることによって知的障害者が「社会的スキル」を獲得していくことが期待されている⁷⁾。「実際にバスに乗る、買い物をする、電話をかける、ビデオを借りる、人と付き合う」といった活動を通して「社会で暮らしていくためのわざ」が獲得できるとされ、そうした活動のためにもヘルパーが重要だと述べられるのである。そして、ヘルパーの役割は、そうした活動のなかで「できない部分だけをさりげなくサポー

ト」することであると想定される。『支援費ってだいじょうぶ!?』においては、「ホームヘルプサービスの基本は、あくまでも本人に寄り添う支援ということです」と述べられており⁸⁾、ヘルパーによる利用者への意図的・積極的な働きかけは重視されていない。優れた援助の例として示されるのは、散歩の際に飛び出しの危険を回避したり、知的障害者がパニックを起こさなくてすむように配慮したりということであり、最低限必要な安全の保障やトラブルの防止などがヘルパーの役割とされているようである。『支援費ってだいじょうぶ!?』の議論は、「社会的スキル」の獲得という発達支援機能を知的障害者ホームヘルプに認めるものといえるが、発達支援の役割をヘルパーに認めることについては消極的なものであるといえよう。

二つ目に、日本知的障害者福祉協会が発行している月刊誌『さぽーと』に掲載された厚生労働省障害福祉専門官山口和彦の見解をみる⁹⁾。ここで、山口は、知的障害者ホームヘルプには「エンパワメントの視点からの支援」が必要であるとして、「知的障害のある人への支援は、行為の代行よりも方法や習慣の習得に軸足を置いたものになることが多いと思う」と述べている。そして、一人暮らしを始めた知的障害者を例に、食器の後片付けを本人にしてもらったりごみを出すときに本人と一緒にいったりということの積み重ねが、知的障害者本人の日常生活への適応力を高めることにつながる。山口は、「ヘルパーは本人の力を少しずつ引き出し、これを伸ばしていくという姿勢で関わりを持ち続けるべき」と考えるのである。山口の議論は、知的障害者ホームヘルプを通して引き出される力として「日常生活への適応力」が主に考えられている点で、「社会的スキル」の獲得を期待する『支援費ってだいじょうぶ!?』の議論とも共通する面がある。また、ヘルパーが行為を代行せず可能な範囲で知的障害者自身が行うようにしていくという点も、「できない部分のサポート」をヘルパーの役割とする『支援費ってだいじょうぶ!?』の議論と共通している。しかし、知的障害者自身の力を引き出すことがヘルパーの目的意識的な役割として強調されている点がやや異なっている。

三つ目に、知的障害者地域生活支援システム研究委員会がまとめた『支援費制度における知的障害者ホームヘルプの展望と課題』においては、「知的障害者ヘルパーに求められる基本姿勢」として、「全日本手をつなぐ育成会第4回地域生活支援セミナー」における中村修子の発言が引用されている¹⁰⁾。そこで、中村は、「大事なものは、コミュニケーションの支援だと考えま

す」と述べ、知的障害者が「まわりの言っていること、起こっていることがよく理解できない、あるいは自分の言いたいことがうまく伝えられない等の時、補足したり解説したり」することを、ヘルパーの役割として重視している。そして、「炊事、洗濯などを手早くこなす」ことよりも、「当事者と一緒に考え、選択肢を提示し、時間がかかったり失敗しても自分で選び、自分で決めていくという部分を支援する」ことが重要だと述べている。知的障害者が苦手とする部分を補うことに重点を置いている点で、中村の議論も前の二つの議論からの連続性をもつ。ただ、自己選択・自己決定を支援するというヘルパーの側の姿勢が提示されていることが、前の議論との相違となっている。

四つ目に、全国社会福祉協議会が発行している『障害者のニーズに基づくホームヘルプサービス提供の手引き』をみておきたい¹¹⁾。そこでは、知的障害者だけでなく身体障害者も対象として含んだ障害者ホームヘルプに関して、質の異なる二つのニーズについて述べられている。一つは、「利用者のいのちと暮らしを支えるニーズ」であり、最も基本的なものとされるニーズである。もう一つが、「日常生活を快適に過ごすためのアメニティ、および自己実現に関するニーズ」であって、このニーズに関連して「利用者の地域における社会参加や自己実現、成長発達を支える視点も必要である」とされる。そして、この視点から、『障害者のニーズに基づくホームヘルプサービス提供の手引き』は、障害者ホームヘルプの基本的な機能として、社会活動・自己実現のための活動参加への支援の機能や、育成・訓練ニーズに対応する機能(開発的機能)を挙げている。しかし、前者の機能としては活動に関する情報提供や活動場面までの送迎などが想定されているのであって、障害者の「自己実現」を目的としてのヘルパーによる意図的な働きかけが考えられているのではない。また、後者の機能としてまず示されるのは「障害児の発達支援、生活力を高めるための実習(調理実習)等の機能」であり、「発達支援」は障害をもつ子どもに対象が限定され、「開発」されるべきものとしては「生活力」が中心に置かれていることが分かる。「発達支援」などの語が用いられてはいるが、ヘルパーの役割のとらえ方などに関して、他の三つの議論と大きくは異ならない議論であるといえる。

B 理論的課題の所在

前節でみた四つの議論をふまえて、本稿で論点としたい点は以下の二点である。

一つは、知的障害者ホームヘルプが発達支援機能をもつとして、主にどのような面での発達を支援できるのかという、知的障害者ホームヘルプの目的にも関わる問題である。従来の議論では、「社会的スキル」「日常生活への適応力」「生活力」などと表現されるような生活技能の獲得を期待するものが多かった。また、自己決定の実現を重視する議論もあった。そうした面での発達の支援が中心になるのか、別の面での発達支援機能もあるのかということについて考える。

もう一つは、ヘルパーの役割は「できない部分を補う」ことだけなのか、他に重要な役割はないのか、発達支援を目的とした意図的・積極的な働きかけは必要なのかなどの問題である。上でみた議論においては、知的障害者の力を引き出す「エンパワメント」としてのヘルパーの役割を重視するかどうかに関わらず、「できない部分を補う」ことをヘルパーの役割として考える傾向が強かった。しかし、主に高齢者を対象とする介護をめぐるのは、「できない部分を補う」ことをヘルパーの役割としてみることを明確に否定し、介護を受ける人の力を引き出すことを介護としてみる議論も定着している¹²⁾。知的障害者ホームヘルプにおいてヘルパーの役割をどのように考えるかは、発達支援機能に関わっても根本的な問題である。

2 研究方法

上記の問題意識に立って、知的障害者ホームヘルプの目的やヘルパーに求められる役割について考察するため、関係者へのインタビュー調査を行った。インタビュー調査は、利用者である知的障害者の側、ヘルパー、居宅介護事業者という三者を対象にして実施し、より多面的に知的障害者ホームヘルプについて検討することを試みた。

インタビューを調査方法としたのは、知的障害者ホームヘルプのニーズや実践のあり方は個別性が高いと思われるため、アンケートなどによる数量的な調査方法よりも、個別の事例がより具体的に把握できる調査方法が適していると考えられたからである。

利用者側へのインタビュー調査の対象者は、東京都X市にある居宅介護事業者Yの利用者のなかから、障害の程度・年齢・性別などが様々になるように留意しつつ、任意に選定した(表1)。本人へのインタビューが困難な場合が多いため主に利用者の親を対象としたが、2人の利用者については本人から回答を得た。ホームヘルプ・ガイドヘルプを利用している頻度や活動内

容、これまでの利用において良いと感じられた点、改善を望む点、ヘルパーに期待する役割などについて質問をした。

ヘルパーへのインタビュー調査の対象者は、東京都X市にある居宅介護事業者Yのヘルパーのなかから4人を任意に選定した。援助が成功したと感じた事例、困難を感じた事例などについて質問をした。

居宅介護事業者へのインタビュー調査の対象は、所在する市区町村や運営主体の種類が異なるようにしながら、任意に選定した(表2)。運営の実態や、知的障害者ホームヘルプの目的やヘルパーの役割をどのように考えているかなどについて質問をした。

次章で、インタビュー調査から知的障害者ホームヘルプの目的やヘルパーの役割について示されたことを整理して示す。なお、インタビュー調査における回答の記述に際しては、煩雑さを避けるため、回答者のことばをそのまま記述することはせず、録音記録をもとに回答内容を要約する形で記述する。

表1 利用者側への調査の対象者

利用者	年齢	性別	手帳 ¹³⁾	回答者
A	18	女性	2度	母親
B	22	男性	3度	本人
C	24	男性	2度	母親
D	24	男性	2度	父親
E	27	女性	2度	母親
F	31	男性	3度	母親
G	33	男性	2度	母親
H	38	男性	2度	母親
I	52	男性	3度	本人

表2 調査対象とした居宅介護事業者

事業者	所在地	運営主体	発足年
ア	東京都A区	NPO法人	2003年
イ	東京都B市	社会福祉法人	1996年
ウ	滋賀県C市	社会福祉法人	1997年
エ	大阪府D市	NPO法人	2000年
オ	大阪府E市	社会福祉法人	2002年

3 知的障害者ホームヘルプの目的とヘルパーの役割

A 生活内容の幅の拡大

利用者側へのインタビュー調査では、すべての人が知的障害者ホームヘルプを主にガイドヘルプの形で利用しており、自宅での介護としてはほとんど利用して

いないことが分かった。居宅介護事業者へのインタビュー調査でも、すべての事業者でガイドヘルプが知的障害者ホームヘルプの中心になっており、「事業者A」では実質的にガイドヘルプのみを行っていることが分かった。また、ガイドヘルプは、ある場所への送迎よりも、数時間の外出の付き添いという形で利用されていることが多かった。

そのことをふまえたうえで、利用者側へのインタビュー調査の結果から、どのような目的で知的障害者ホームヘルプが利用されているかを最初にみていく。以下の二つの回答は利用者本人によるものである。

毎週金曜日にはガイドヘルプを使ってプールに行っている。休みの日はテレビを見たりゲームをしたりしている。家にいても、どこにも行けない。いろいろ出かけられるし、ガイドヘルプを使おうと思った。これからは山登りに行きたい、秩父の山に登りたい、ハイキングをしたい。これまでも高尾山に行った。(利用者B)

土曜日にガイドヘルプをよく利用している。土曜日から日曜日のどちらかはヘルパーと出かける。家族と出かけることはほとんどない。一人で出かけることもない。足が悪くなったので一人では出かけられない。家にいるのはあまり好きでない。出かけるときはヘルパーといっしょで、買い物や映画に行っている。もっと旅行にも行きたい。(利用者I)

ガイドヘルプを利用することで行動の自由を広げ、外出を楽しみたいという利用者の要求がうかがえる。また、知的障害者ホームヘルプが家族による介護を肩代わりするものとしてではなく、家族といたのでは困難な活動を可能にするものとして機能していることが分かる。これらの点は、次のような利用者の親による回答にもみられるものである。

週に3泊はグループホームで暮らしているが週末は帰省する。父親が2年前に亡くなるまでは、いっしょにドライブに行ったりキャッチボールをしたりしていた。毎週1回は親子で出ることが多かったが、急に状況が変わった。去年の春には、母親に対して暴力をふるうことが1ヶ月ほどあった。1年間は我慢していたのだろうと思う。普段の土曜日・日曜日は家にいるので、月に2回くら

い外に連れ出してもらえればいいというのが親の願いだ。温泉などは母親には連れて行けないし、トイレなども困る。自分ではっきり決めないが、本人自身は、温泉に行きたい、キャッチボールに行きたい、ドライブに行きたいなどと言っている。ガイドヘルプを利用して外出したときは、楽しかったと言って帰ってくる。(利用者 F)

また、以下の回答からは、知的障害者ホームヘルプを利用しての外出が利用者の生活にとって欠かせないものになっていることが分かる。

作業所でもそれほど仕事をせずソファに座っていることが多いようだが、土曜日や日曜日は家でいるとごろごろして過ごしてしまう。横になっていて、刺激がない状態になっている。きょうだいの年齢構成の関係もあって、本人を連れて家族で出かけるのは難しくなっていて、出かけるのは自分と2人での買い物か散歩くらい。最近は自分の時間が足りなくて、それも負担になっている。外に連れ出さないと刺激がなくなるし、筋力が落ちると思って利用している。毎週歩いてもらうとか、刺激を与えて、運動するようにしたい。家で寝ていても、「〇〇さんが来たよ」というと起きるので、嫌ではないよう。家でごろごろしているのも、することがなくてつまらないからだと思う。ガイドヘルプを利用することで生活が規則正しくなる。それがないと、生活が寝たきりになってしまう。(利用者 A)

以上のように、知的障害者ホームヘルプの利用によって家族介護では困難であった活動が可能になり、利用者である知的障害者が余暇生活における自由度を高めている様子が示されている。そして、上の回答からもうかがえるように、そうした生活内容の幅の拡大が生活の充実につながっている。生活の充実のなかでこそ人間の発達が実現していくことを考えるならば、生活内容の幅の拡大も知的障害者ホームヘルプの発達支援機能として評価することができるのではないだろうか。

B 利用者の楽しみの拡大

前節で示した利用者側からの回答によっても、生活を楽しむことを目的として知的障害者ホームヘルプが利用されていることがうかがえるが、以下のような回答からも、利用者側では利用者の楽しみが重視されて

いることが分かる。

教育的にこういうことをしてくださいというのはないが、どうやったらその時間を楽しんでいきいき過ごせるかが重要だと思う。親だと、楽しませるというよりも、運動させなきゃとか、1時間で帰ってこなければ、といったふうになってしまう。(利用者 A)

元気に出かけていって元気に帰ってくる、「今日は楽しかったな」ということなら一週間のストレスが解消される。「生きていてよかったな」というような感覚を味わわせてあげたい。普段行けないところへ連れて行ってもらうので、出会う人々とかが刺激になって、楽しい思いをできたらいい。以前は叱咤激励で、しつけを考えていたが、いろんな経験をさせてあげたらいい。(利用者 G)

宿泊体験は訓練的な意味をもっているが、ヘルパーと利用者が何組かで出かけるときなどは本人が楽しんで帰ってくればそれでいい。(利用者 H)

知的障害者ホームヘルプの意義に関する従来の議論においては、ガイドヘルプに焦点を当てたものも含めて、「社会的スキル」など生活技能の獲得が強調されており、利用者の楽しみということにはほとんど言及がなかった。しかし、利用者側からの回答では、逆に、生活技能の獲得を期待する回答はなく、利用者が楽しむことについての要求が多く語られた。

調査対象となった利用者が余暇生活支援としてガイドヘルプを利用していることも、利用者の楽しみが強調される理由であろう。また、利用者が外出を楽しみたいという要求は実践的にはみえやすいため、これまでの議論においては特別強調されてこなかったのかもしれない。しかし、知的障害者ホームヘルプにおいて何を目的として重視していくのかということは援助の基盤となる問題であるため、利用者が生活を楽しむことへの要求を確認しておく必要はあると考えられる。

なお、利用者が楽しむことは、居宅介護事業者 Y の利用者の側だけに重視されているのではなく、以下の回答にみるように、いくつかの居宅介護事業者においても非常に重要なこととしてとらえられている。

本人がしたいことは尊重しつつ、誰でも得意なことをもっているのも、本人のよい面をヘルパー

の働きかけによって引き出してほしい。ボウリングをやったことがなかった人が初めて参加して楽しそうにしていたとか、カラオケに初めて参加したとか、こういう一面もある、というのを家族にも伝える。また、将来的には、事業者がレクリエーションのプランを企画するだけでなく、利用者が自分達から行きたい場所などの要求を出すようになってくれるとよい。(事業者A)

作業所の職員をしている人がヘルパーをするような場合があるが、あまりよいことだとは思っていない。働く場と余暇は違う。ヘルパーは余暇の領域での専門職だと考えている。ヘルパーにとって重要なことは、利用者を楽しませ、自らも楽しむことだと考えている。危険なこと、迷惑なこと意外は厳しいことを言わない。最初は関係をつくるところから始めるが、次第にプールに行ってみるとか、新しい楽しみを見つけていくようにしている。(事業者E)

これらの居宅介護事業者による回答においては、利用者が楽しむことをただ重視するだけではなく、ヘルパーの関わりによる利用者の楽しみの広がりが求められていることが分かる。そして、そうしたことへの期待は、以下の回答にみるように、利用者の親からも語られているものである。

レコードを自分でかけるということを以前やっていたので、ヘルパーの人にやらせてみてもらうと、自分でレコードの針を起こすなどして、大丈夫だった。自分で自分の時間を楽しめるようになればいい。ホームヘルプがそのきっかけになればいいと思う。(利用者G)

嫌がってプールに入れないことがよくあった。それで、町を歩くということがあった。それはそれでもいい。ただ、放課後の活動で18年くらい付き合ってきてくれている人が言うには、プールからすぐ出ようとするが、すごく嫌なのではなくて、プールを歩いて端まで来るとそのまま出るものだと思っているような様子で、手を添えて向きを変えたとまた歩いていく、本当に嫌なときは力づくでも入らない、と。もしも一回だけで、嫌がったからだめだと思ったのだとしたら、何回か挑戦させてほしいと思う。食べ物についても、一回あげ

て嫌がったから嫌いだとしてしまうのではなく、一回だけでこうだと思うのではなく、繰り返ししてほしい。食べ物にしても行くことにしても、一回であきらめないでほしい。本人も何だか分かっていないところがあるので。(利用者C)

また、ヘルパーからの以下の回答では、ヘルパーが工夫もしながら関わるうちに利用者が楽しめる活動ができるようになったことが、困難だった援助がうまくいった例として語られている。

養護学校高等部生のある利用者は、最初のときは家に迎えに行ったが、母親から離れようとせず、外に出ることができなかった。そういうことが2回あった。次に、母親に自動車で連れてきてもらって、本人の好きな電車を見たり、電車に乗ったりしようということにしたが、母親から離れようとせず、ヘルパーと出かけることができなかった。何回かするうちにヘルパーに手を引かれてうろろろすることはできるようになってきたので、二人がエレベーターに乗ったときに母親が隠れると、あきらめたのか、電車に乗って出かけることになった。それからは、ヘルパーと電車に乗れることを理解したようで、すんなりと電車に乗れるようになった。(ヘルパーa)

以上のように、知的障害者ホームヘルプ、とくに余暇生活支援としてのガイドヘルプにおいては、利用者が生活を楽しむことがまず重視されている。そして、その楽しみを広げていく役割、発達支援ともいえる役割がヘルパーに期待されていることもうかがえるのである。

C 利用者理解とコミュニケーション

利用者の親とヘルパーへのインタビュー調査において、ヘルパーによる利用者理解を重視する回答が多くみられた。

利用者理解が重視される理由の一つは、知的障害者ホームヘルプの基本的な過程を進めるために利用者理解が必要なことである。利用者の意思表示が必ずしも明確でない知的障害者ホームヘルプにおいては、様々な場面でヘルパーが利用者を理解して対応することが不可欠であることが少なくない。また、意思表示がされる場合でも、それが独自の身ぶりなどを方法とすることもあり、利用者個人の意思表示の方法をヘルパー

が理解していく必要がある。さらに、トラブルを避けるためにも、利用者の嫌いなことや好きなことを理解しておくことなどが求められるのである。

しかし、利用者理解が重視されるのは、援助を円滑に進めるために必要だからというだけではない。利用者側とヘルパーの双方に、ヘルパーの利用者理解に基づくコミュニケーションに対する要求があることが、インタビュー調査からうかがわれた。まず、利用者の親からは以下のような回答があった。

「仕事は仕事だが、そこに気持ちが入ってほしい。障害のある人を理解して、話せる人だと会話をするのと同じように、重い障害の人でも、連れ出してやっているという気持ちとか、モノ扱いのようにぐいぐい引っ張るだけというのではなく、理解しつついっしょに歩いてほしい。トイレの介助が上手とかいうことも大事だが、いっしょに楽しく過ごしてみたいな、というところがほしい。(利用者 C)」

主に関わっているヘルパーは2人だが、その2人とも一生懸命関わろうとしてくれているというのが分かる。たとえば、一人は、間違っている、本人の行動を自分で意味づけて、「こうしたいのかな」と関わってくれる。「私の分、食べる?」とか、「おいしい?」と声をかけながらやっている。一生懸命に本人のことを探ろうとしてくれている。仕事だと思っているだけでなく、正面から付き合いおうとしてくれる。いい時間を共有しようと思ってくれている。ただ、あるヘルパーさんは、後を追いかけるだけで、会話がないう。自分から話しかけることがほとんどない。ただ手をふいてあげるとか、お世話してあげるという程度で、付き合いという感じではない。もう少し探ってほしいし、いろいろ試して、間違っているでもいいから、その子のことを知ろうとしてほしい。(利用者 A)

また、以下の回答では、ヘルパーの利用者理解にもとづく利用者とのコミュニケーションが援助の質にとって重要なものとして考えられている。

ある40代の女性ヘルパーは、本人の様子をみて対応してくれる。いろいろな曲のレコードをかけてみるなど、本人の反応をみながらやってくれる。また、以前ヘルパーとコンサートに行ったが、コ

ンサートにいっしょに行く相手というのは重要だと思う。この曲のレコードよくかけたよね、とか、そういう働きかけができない人で行ったが、それはよくなかった。(利用者 H)

次に、以下の回答のように、ヘルパーの側にも、援助のための必要性とはひとまず別に、利用者理解や利用者とのコミュニケーションに対する要求があることがうかがえる。

よく付き合っていると、これもできるあれもできるというのが分かってくる。同時に、単に障害をもっている人というのではなく、その人個人がみえてきた。そういうことが一番のやりがいでもある。(ヘルパー c)

相手の返事があるとは限らないが、なるべく多く話しかけている。それをしないといっしょに時間を過ごすなかで行きづまってしまうだろうと思う。(ヘルパー d)

利用者本人からはヘルパーによる利用者理解などについて特に語られなかったが、ヘルパーとのコミュニケーション自体が知的障害者ホームヘルプにおける利用者の要求の一つになっている場合もあることが、以下のような回答からもうかがえる。

ただ時間内を過ごせばいいというのではなくて、ある程度本人のことを知ってほしい。本人の、心のケアのようなものをしてくれるとうれしい。親に心を開いていないわけではないが、友だちも障害をもっている友だちで、それほど愚痴のこぼしがないという面もあるよう。親がないからその間連れ出して遊びに行くということだけではなくて、本人には、話をしたい、聞いてほしい、ということもある。同性の仲間と、よく分かる人としゃべりたいということ。話し相手になってもらえるといい。仕事場だと、友だちと上手に楽しそうに会話するということが少ないよう。ある程度理解して寛容に話ができる人がほしい。そういう意味でも、本人のことをよく分かっているヘルパーがいい。(利用者 F)

話をするのが好きな利用者がいて、その人とは、野球の話や、女の子の噂話などをしている。(ヘルパー e)

ルパー b)

以上のように、ホームヘルプを進めていくための手段としてのコミュニケーションではなく、何らかの共感と結びついた人格的なコミュニケーションが求められていることがうかがえる。こうしたコミュニケーションを重視するならば、「できない部分を補う」という過程だけに関心を集中させるのではなく、ホームヘルプの過程全体における相互主体的なコミュニケーションに注目しなければならない。ヘルパーの役割についても、「できない部分を補う」過程に限定されない検討が必要になるだろう。ホームヘルプにおけるコミュニケーションがもつ意味、コミュニケーションの過程におけるヘルパーのあり方を考えることが求められるのである。

コミュニケーションがなされるということは、そこでヘルパーが利用者に対して主体的な関わりをもつということである。そうした関わりが、「できない部分を補う」ことにとどまらない、より積極的な発達支援機能をもつ可能性がある。また、インタビュー調査における回答のいくつかは、ヘルパーがそうした発達支援の役割を果たすことを期待するものでもあった。

4 総括と今後の課題

以上では、知的障害者ホームヘルプが利用者の生活内容の幅や楽しみの拡大につながり得ること、その点で発達支援機能をもつことをみてきた。ヘルパーの役割として、生活技能の獲得よりも、利用者の楽しみを充実させていくことが重視されている場合が少なくないこともみた。また、利用者理解にもとづくコミュニケーションがヘルパーに求められているところから、ヘルパーの役割が「できない部分を補う」ことにとどまらない、より積極的な発達支援機能をもつ可能性について考察した。

しかし、本研究では、インタビュー調査の対象数も少なく、知的障害者ホームヘルプの目的やヘルパーの役割を全面的には明らかにできず、それらについておおまかな傾向を把握したにすぎない。知的障害者ホームヘルプの発達支援機能についてのより丁寧な検討は今後の課題である。

また、特に余暇生活支援としてのガイドヘルプを中心として、利用者の楽しみの拡大という発達支援機能を知的障害者ホームヘルプがもつことをふまえると、知的障害者の「自主的な学習・文化活動を含む余暇生

活」の保障を考えていくうえで、以下の二点が課題となる。

一つは、社会的資源が貧困ななかで様々なニーズを未分化なまま担ってきた、障害者青年学級のような集団的な教育・学習の場がもつ役割の再検討である。原則としては個人の援助である知的障害者ホームヘルプの余暇生活支援に果たす役割が明らかにされていくことによって、集団的な教育・学習の場がもつ独自の役割もより鮮明になると考えられる。

もう一つの課題は、集団的な教育・学習の場がもつ役割の再検討をふまえたうえで、知的障害者の「自主的な学習・文化活動を含む余暇生活」という生活領域において、社会的支援のあり方を全体的・総合的に考えていくことである。そのためには、教育と社会福祉も統一的に把握していく必要がある。発達支援を主な機能とする教育と生活支援を主な機能とする社会福祉のそれぞれの独自性にも注意しながら、教育のもつ社会福祉の機能や社会福祉のもつ教育的機能をみていくことが求められる¹⁴⁾。発達支援を障害者青年学級のような教育・学習の場だけが担うのでもなければ、生活支援を知的障害者ホームヘルプなどの社会福祉的援助だけが担うのでもなく、様々な社会的支援が全体として発達支援や生活支援を実現していくような余暇生活支援システムの構築が課題なのである。知的障害者ホームヘルプの発達支援機能の検討という本稿の試みは、そうした教育と福祉の統一的把握を進めようとするものでもあった。

(指導教官 佐藤一子教授)

註

- 1) 津田英二・大石洋子「障害者の学びと表現活動」日本社会教育学会編『現代の人権と社会教育の価値』東洋館出版社、2004、p292-310、など。
- 2) 宮原誠一「教育の本質」『宮原誠一教育論集 第一巻』国土社、1949/1976、p7-25。
- 3) 丸山啓史「重度知的障害者の余暇保障に関する一考察」『生涯学習・社会教育学研究』第29号、2004、p65-66。
- 4) 知的障害児者余暇活動研究委員会「つどう・でかける・あそぶ・ハマル」(全日本手をつなぐ育成会、2004)においても、余暇生活の充実に困難を抱える知的障害児者の実態が示されている。
- 5) 丸山啓史「重度身体障害者グループホームにおける生活力形成」『月刊社会教育』2004年9月号、p43-48。なお、これは、同じような問題意識から障害者グループホームがもつ発達支援機能について考察したものである。
- 6) 知的障害者ホームヘルプサービス研究会編『知的障害者ホームヘルプサービスの実践』(中央法規、2004)では、知的障害者ホーム

ヘルプの実践事例が多く紹介されているが、理論的な整理はほとんどなされていない。

- 7) 岩本真紀子・岩城正恵・鈴木伸佳編『支援費ってだいじょうぶ!?』全日本手をつなぐ育成会, 2003, p35。
- 8) 同上, p43。
- 9) 山口和彦「支援費におけるホームヘルプサービスについて」『さぼーと』2002年8月号, p22-25。
- 10) 知的障害者地域生活支援システム研究委員会『支援費制度における知的障害者ホームヘルプの展望と課題(改訂版)』, 2002, p6。
- 11) 障害者のニーズに基づくホームヘルプサービスのあり方に関する調査研究委員会『障害者のニーズに基づくホームヘルプサービス提供の手引き』全国社会福祉協議会, 2003, p6-10。
- 12) 井上千津子「介護とは」日本介護福祉学会編『新・介護福祉学とは何か』ミネルヴァ書房, 2000, p8。
- 13) 療育手帳は障害の重さを1度から4度までの等級で表現しており, 数字が大きいほど障害は軽い。1度は人数も少なく, 4度の知的障害者のホームヘルプ利用は少ない。本研究の調査対象が特別に偏っているわけではない。
- 14) 高橋正教「教育福祉論をめぐる理論状況と課題」『中京女子大学紀要』第24号, 1990, p103-104。